

の報を受けウラジオストックに向かったが凍結し、また一年間シベリア生活を余儀なくされた。シベリアでの生活は、零下四〇度の酷寒の中でコルホーズ（集団農場）に五十人程度派遣され、冬は馬鈴薯^{ジャガイモ}の芽かきや選別作業、飲料水や食糧、暖房材の調達が主な作業であった。シベリアの収容所に入ってから栄養失調で体力がなくなり、シラミがわき、朝起きると何やらモゾモゾすると思ったら、隣の人が死んでいてシラミがこつちに移ってくるのだ。一部屋二十メートル位、入り口にストーブが一つあるだけで、大変寒い。やっと五月に春がきて、麦、砂糖大根、馬鈴薯の種蒔きや生育作業をさせられた。

ジャポンスキー、ダモイ

昭和二十四年九月、ソ連兵が「ジャポンスキー、ダモイ」と言い、帰国を知らせてくれた。待ちに待った引揚げだ。九月三十日ナホトカを出航、十月三日舞鶴に上陸した。

ああ、やれやれ日本に着いた。皆、歓喜し、抱き合って喜んだ。涙が自然に流れ出る。コスモスの花咲く道を復員局まで歩いた記憶は、今も忘れられない思い出である。

復員局でGHQから質問や調査を受け、上陸一週間後の十月十日ようやく解放され、兄の出迎えを受け、馬淵の我が家に帰ることができた。

労苦調査

広島県 平本 直行

一、出生から入隊

- ①大正十四（一九二五）年十一月二日、広島市観音町に生まれる。昭和十六（一九四一）年三月二十五日、満州電信電話株式会社大連社員養成所卒業（後、大連通信学校）
- ②牡丹江電信電話局通信課勤務、一心寮（独身）

二、ソ連軍侵攻前

- ①十九年度徴兵令により、昭和十九年三月二十五日徴兵検査第一乙種合格。現役兵として昭和十九年九月一日、鞍山高射砲第二六連隊四中隊入隊

装備 何一つ不自由なし、全て整っていた。

- ②他の部隊、社会状況等不明

三、ソ連軍侵攻

- ①北滿の状況不明。綏芬河、黒河、満洲里、三方面より侵攻、八月九日。
- ②高射二六連隊は、新京（長春）死守のため、ソ連戦車撃退壕を掘って高射砲にて対戦すべく陣地を造っていた。

四、終戦

- ①関東軍司令部通信班にて聞く。その時の感慨と言われても、何が何だかさっぱり分からない、力が尽きるというか無遊病者というか、真つ当

にその時の心境は筆舌ではあらわせない。

- ②軍は新京を出発して公主嶺に集結す。（ここにて武装解除）

- ③軍からの解放なし。

- ④次の日本よりの命令を待つというこゝで、今までと変わることはなかった。

- ⑤新京の街ではいろんな被害があったと聞くも、公主嶺まではニュースは入ってこなかった。

五、シベリア抑留地への旅

- ①入ソまで生活状態は今までと何も変わらなかつた。米も十分であった。ただ野菜や肉は手に入らず不自由したが、砂糖、塩、シヨウユ、ミソ等十分持っていた。

- ②公主嶺から黒河までは五日ぐらいかかったが、途中貨車を止めて米を炊き、おかずを作る。家畜並みと言えば一貨車に三十人くらい入っていたので便所などは大変不自由であったけど、「東京ダモイ」という楽しみがあるので古里の

歌が歌われたり、案外明るい旅であった。ハルピンを過ぎてから日本の開拓団の戦った跡があちこちに見られた。

③昭和二十年九月の何日かわからないが、黒河よりブラゴエシチェンスクに送られ入ソした。そこから五日間ほど西に向かつて貨車はボチボチ走った。

九月の二十日頃、チタ州シワキの村に着いた。

六、抑留地の生活

①抑留地を変わったことはない。

作業は一班五百人が山に入り伐採作業。

私は二班の製材所の作業に就いた。千人であった。

②シラミの発生は大変であった。

夜、外に出してシラミを凍らせてゴシゴシ雪中に落とし、卵を爪でプチプチつぶすという原始的シラミ退治であった。

発疹チフスで大分多くの友を亡くした。

衣服の消毒とか入浴とかは、何日に一回であったかよく覚えていない。

身体検査は、十日に一回ほど女医が来て、日本の軍医立会いの中、尻の皮を引っ張って作業ができるかできないかを検査するだけだった。風呂は高い所の下で石を焼いて水をかけ湯煙による蒸し風呂で、私などはその高温に耐えられずすぐに出た。しかし衣服の消毒が終わらないため寒い所で長時間待たされた。

③一班 山組、五百人

二班 製材組、千人

七、労 役

①六に書いた通り別に作業はなかった。

②十時間程で、別に夜間作業があった。それは山から送って来た材木を貨車より下ろす作業であった。

③ノルマについては知らない。

④夜間作業中、明かりがないので材木の下敷きに

なって死んだ人が大分いた。

⑤昭和二十年十一月までしかシワキの抑留地になかったので後日のことは分からない。

八、収容所

①国外追放されてから（古茂山収容所）

②平壤市三合里ソ連作業収容所（八月一日）

約二万人程いた。ここからソ連に入ソした人も三万人ぐらいいたと聞く。

③八月十日頃より真性コレラ発生。九月十日頃までの一カ月で千五百人以上死亡する。

毎日毎日が死と生の谷間であった。私の班十五人中十四人は死亡した。私の抑留生活は毎日が死の隣にいて、生を考えたことはなかった。

いつ自分が死ぬか、それだけに一人一人の遺体をどう安置してあげるか、ただだけが私のできることで、そうすることで私も遺体を安置してもらえると信じて、多い日は百人の死体が運動場に並べられていた。初めは八人で埋葬し

ていたのが、最後には私一人が遺体を背中にしばって一キロくらいの山道を運んで埋めました。朝一人、午後一人、二回は大変な重労働であったけど、それが皆様への恩返しだと思つて、一カ月どのくらいの人数を埋葬したか分かりません。

私のシベリア抑留は三合里だと思っています。この三合里で昭和二十一年八月、真性コレラが蔓延して約千五百人の死者を出した。

三合里コレラ事件は余りにも悲惨で、文にする言葉さえ失う。もちろん医師、医薬品が全くない。一万人に近い病人が集団生活をしている。ハエの媒介で多くの死者を出した。今も「伝染病」の文字にはあの時のあの惨状が頭をよぎり、忘れ去ることはできない。そしてこの死者の後始末もまた大変な作業であった。朝百人という死者が広場に横たわった。ハエの止まった食物で約二時間もすると嘔吐する。下痢が始まり三時間で死に至る。日々山のような死体に遭

遇する。埋葬のために歩ける者は皆駆り出された。四人が一組となり、担架に死体とスコップを乗せ山を登り目的地に運ぶ。

死体の身長をスコップで計り、棺桶のような穴を掘った。草を敷き死体を入れ、できるだけの野花を摘み、そつと顔に乗せる。四人は大きな声で「終わりました」と叫ぶ。その声でお坊様が一番短いお経をあげる。「お前だけ送りはしない、俺達も行く。一日も早く日本に帰れよ」と、私はとめどなく流れる涙で叫んでいた。その時の状況は決して決して忘却はしない。この三合里は自分の胸の奥深くしみこんで、大きなしみとなっている。

九、帰還

①平壤市三合里ソ連収容所、昭和二十一年十二月二十日頃

②帰還集結地（興南、北朝鮮の日本海側）

③帰還船は不明。

片足、両足、両手がない人が千人程いたので（両手両足のない人は二十人）乗船は大変でした。大きなもっこに板の座を作り、一回に五〜十人ずつ乗船するのですけれど、ベッドに運ぶのも大変で、二千五百人乗船が終わるのに三日程かかった。

④船内の生活は、健者と病人の看護がうまくいつて平穩でした。船内の雑談は古里の話ばかりで、日本がどうなっているのかという不安は一つもなく、満州に行った昔の古里しか頭の中にはなく、真つ当に楽しい船旅でした。

⑤長崎県佐世保上陸、昭和二十二年一月六日

十、帰国後の生活

満電社員は郵便局に勤務していたが、尾道、三原、福山の局は満員で、二年の遅れは職場がなくなっていた。一般の仕事場はソ連帰りは赤だといつて受け入れてもらえず。加藤海運の沖仲士になつたり日雇い人夫になつたり、個人事業をやつ

て失敗したり、職数はどんなにこなしたかわかりません。そのために年金は国民年金しかなく、今は仕事をしていますが、仕事がなくなったら生きられないと心配しながら七十七歳を迎えています。

今生きている

高知県 中平松鶴

黙(もだ) 深く墓地の下ゆく戦友も

このシベリアに死をおそるらし

零下四〇度に近いシベリアの冬、古ぼけた外套に身を包み、寒風に首を縮め、警備兵にせきたてられながら作業に駆り出された。その往復にはこの墓地の下を通った。この歌は同じ隊にいた鳳城さん(消息不明)の作。

月一回(二回ぐらいたったかもしれない)同好者による歌会での当選歌であるが、よほど感銘し

たものとみえて、満州ポケ、シベリアポケで記憶喪失症の私によく覚えていられたと我ながら感心している。

昭和二十(一九四五)年終戦直後の私たちの集結地は満州チチハル(原隊海拉爾)であった。チチハルはシベリア鉄道で内地送還というふれ込みで退院組の一個大隊が編成され、貨車(客車ではない)の人となったのは十一月。関東軍防疫給水部要員であった私たちは同年兵(二年兵になったばかり)十数人とともにこれに加わったわけである。隠していたつもりの腕時計が警備兵の目に触れ、略奪されたのもその車中での出来事。警備兵はセコンド万年筆を虎視たんたとねらっていた。両腕にいくつかの腕時計、バンドにはいくつかのセコンドをぶらさげ得意満面だった若い警備兵たちの姿が思い出される。

貨車は真ん中にストープを取りつけ二段に仕切ってあった。俘虜輸送用の改造車であろう。チチハルを東するか西するかが我々運命の分かれ目、と